

第2報告（講演会報告／翻訳）

社会構造と人間エージェンシー

ジャン・Ch. カールソン (Jan Ch. Karlsson)ⁱ，加藤 雅俊ⁱⁱ 訳

社会的実在は、多様なレベル、多様な力、多様な影響力、多様な出来事、そして多様な生きた経験を伴う複雑なものである。これらの錯雑した状態について、私たちはどのように調査することができるであろうか？これを可能にする第一歩は、社会構造と人間エージェンシーを分析的に区別することであり、次にこれらの関係について研究することである。

私は社会構造が実際に存在していることを主張することから始める。それらは存在しないと主張する社会学者もいる。そして、私は構造的説明 (structural explanation) とエージェンシー的説明 (agency explanation) がどのように組み立てられているかを例示する。これらの説明のタイプは、異なる二つのパラダイムを想起させる。すなわち、事実パラダイム (the fact paradigm) と行為パラダイム (the action paradigm) である。これらの間の矛盾は、長期にわたり、社会科学のジレンマを形成してきた。続いて、私は、これらのジレンマの解決策に関する二つの有望な提案について検討する。ひとつは、アンソニー・ギデンズ (Anthony Giddens) の構造化理論である。構造化理論では、構造とエージェンシーの二重性が指摘される。すなわち、構造とエージェンシーは異なる現象を構成せず、むしろ同じことの二つの側面とされる。もうひとつは、マーガレット・アーチャー (Margaret Archer) の二元

論である。ここでは、構造とエージェンシーは異なるが、相互に結びついた現象とされる。

社会構造は存在するのか？

第一の問題は、社会構造が実際に存在するか否かである。もしそれらが存在するならば、それらは可視的なものではない。私たちはそれを指し示して、「見てみなさい、ここに社会構造が存在する！」などということはできない。この点について考察するために、私たちは、「Xが存在するためには何が存在しなければならないか？」や「Xがないと存在することをやめてしまうがゆえに、取り除くことができないものは何か？」という批判的実在論的な問いを出発点とすることができる。したがって、私たちは、社会に関して、以下のように問うことから始めよう。すなわち、社会が存在するためには、何が存在しなければならないか？と。答えはあまりにも明確に見えるために、答える意欲が起きないほどである。すなわち、それは、人々の行為である。もし行為する人々が存在しないならば、社会もまた存在しないであろう。さらに、社会科学についても同じことがいえるかもしれない。社会科学が研究する社会とは、人々とその行為の存在に依拠している。[したがって] 社会は活動依存的 (activity-dependent) といえる。

しかし、このことは、社会構造が必ず存在しなければならないということを、自動的に意味しない。

i スウェーデン カールシュタット大学

ii 横浜国立大学国際社会科学研究院准教授

それゆえ、私たちは、「社会構造が存在するためには、何が存在しなければならないか」という問いに移らなければならない。解答を作り出すための議論のつながりは以下の通りである。まず、人々がかなりの程度で日々同じ行為を繰り返しているという観察から始めよう。例えば、月曜日は以下のものであった。朝6時30分に起床し、朝食を採り、職場に出かけ、仕事を行い、昼食を採り、再び働き、コーヒー休憩を取り、そしてまた働き、家に帰り、テレビの前で夕食を採り、就寝する。火曜日もほとんど同じように行動し、水曜日、そしてその次の日も。社会生活はかなりの程度、繰り返される実践である。つまり、それはルーティン化されている。どのようにそうなったのか？もしくは、このルーティン化が存在するためには、何が存在しなければならないのだろうか？はじめに、人々がどのように行為すると想定されるかに関する規則が存在しなければならない。いつ仕事が始まるか、道路のどちら側を運転すべきか、そして職場ではどのような洋服を着用すると想定されるか（海岸や結婚式の場とは対照的に）、などに関する規則が存在する。近隣住民への挨拶もしくは会話中の話す順番のような、単純なことのように見えるものでさえ、規則によって囲まれている。つまり、社会生活はかなりの程度規則によって囲まれているのである。そして、ルーティン化はこのことの証明となるのである。もしそのような規則が存在しないならば、ルーティン化も存在しないであろう。

私たちの多くが持つ別の経験とは、同じ規則がいつもすべての人々に適応されるわけではないということである。大学教員は学生とは異なる実践に従い、使用者は被用者とは異なる実践に従い、また男性は女性とは異なる実践に従うと想定されている。社会とは規則により統治されているだけでなく、規則により差異化されるのである。すなわち、異なるカテゴリーの人々のために、異なる規則が存在するのである。それはどのようにして可能になるのだろうか？規則は明らかに個別の人間に結びつけられてい

るのではなく、むしろ社会的地位に結びつけられている。ある瞬間においてある個人が、教員、生徒、使用者もしくは被用者であるというよりも、教員は生徒とは異なる権利と義務を持っており、同様に、使用者は被用者と異なる権利と義務を持っている。社会は基本的に、このような社会的地位と、それに関連した実践と規則から形成されている。

さらに、ある地位における個人は、異なる地位における実践へと方向づけられている。教員の権利と義務は生徒との相互作用に向けられており、使用者のそれらは被用者との相互作用に向けられており、そして大家のそれらは店子との相互作用に向けられているが、もちろんすべての事例において、逆の関係も当てはまる。規則、実践、そして地位は、社会関係の一部もしくは側面である。

本 [パース・ダナーマークほか、佐藤春吉監訳『社会を説明する』ナカニシヤ出版、2015年] の中では、私たちは内的関係と外的関係を区別した。外的関係とは、諸対象が存在するが、それらは相互を構成しないことを指す。他方で、内的関係とは、諸対象をして、それらがそうであるようにする関係を指す。もし諸対象がこの関係の一部でないならば、それらは本質的にそうであるようなものではなくなる。構造の定義は、内的に関係した一連の対象から構成されるものであり、例えば、教員-生徒、使用者-被用者、大家-店子などである。

推論 (reasoning) のこのつながりから、社会構造とそれに関連した実践、地位、規則は、社会活動が存在するために存在しなければならないという結論を、私たちは引き出すことができる。同様に、人間活動は、社会構造が存在するために存在しなければならない。そして、同じことは、社会そのものについても当てはまる。

しかし、構造は相互に結びつけることもできる。

また、関係は相互に関係づけることもできる。社会の網の目としばしば呼ばれるものは、このような社会関係間の関係から構成されており、諸個人はこの網の目を動くことができる。しかしながら、社会科学の調査においては、ある側面、もしくは別の側面に注目することが普通である。たとえ関係によって結びつけられる個人が異なっても、その関係にサーチライトを当てることができる。そして、社会を構成する関係のネットワークの中を移動する個人に注目することもできる。

分析の異なるタイプは、社会科学的研究において構造とエージェンシーがそれぞれ考察される方法によって示すことができる。それらの例を、資本主義的生産様式に関する古典的分析を用いて説明してみよう。

- a 一連のエージェント A と生産手段の間には、所有 (ownership) の関係がある。
- b 一連のエージェント B と生産手段の間には、非所有 (non-ownership) の関係がある。

結果として、そこから以下の結論が導かれる。

- i B が労働力を A に対して売るという関係、すなわち、賃金労働者と資本家という社会地位が生まれる
- ii A, すなわち資本家の間に、市場に関する競争関係が生じる。
- iii B, すなわち賃金労働者の間に、就労に関する競争関係が生じる。
- iv A と B との間、すなわち資本家と労働者の間に、階級対立が生じる。

これらの関係は、個人、技術、労働組織における変化などにかかわらず、世代を越えて再生産される。この社会構造は、これらすべての変化と独立して、存在し続けるのである。

続いて、エージェントとエージェンシー [agents and agency] に移ろう。エージェンシー的説明のもっとも一般的なタイプのひとつは、もし私たちがそれらを論理的言明として示すならば、以下のような形態をとる。

- 1 ある人 A は p を望んでいる。
- 2 A は q を、すなわち、彼女 [A] が x をすることによって、p が実現すると信じている。
- 3 それゆえ、A は x を行う。

これが何を意味するかを見てみよう。

- (1) ある人 A は p を望んでいる。

私は、あることが生じてほしいと望んでいる。例えば、アイスクリームを手に入れる、ロックスターになる、もしくはすべての戦争を終わらすことなどである。

- (2) A は q を、すなわち、彼女が x をすることによって、p が実現すると信じている。

もしある特定の行為を行えば、望みがかなうと私は考えている。その行為とは、アイスクリームバーでお金を支払うことであったり、ローリングストーンズに自分をメンバーに加えるように手紙を書くことであったり、国際連合の諸機関に参加することなどである。

- (3) それゆえ、A は x を行う。

最終的に、信じることを行えば望みがかなうであろうと考えて、私はそれを行う。例えば、アイスクリームバーに行きお金を払うこと、ローリングストーンズに手紙を書くこと、そして、国際連合の諸機関に加入することなどである。

この分析は、エージェントが意図的であることを所与としている。すなわち、望みを実現するために、つまり目的に到達するために、エージェントは、目的を実現しようとする手段を用いる。これは伝統的なエージェント的説明であるが、結論が早く来すぎてしまう。そこには、Aがxを行うことを妨げる諸条件があるかもしれない。このような場合、Aはxを行おうと試みるが、彼女は行為を通じてそれを遂行する力を持たないのである。私たちは、伝統的エージェント的説明の(3)に代わって、以下のもの[別の(3)]を手に入れる。

(3) Aはxを行おうと試みる。

例えば、私がアイスクリームを欲していることを考えてみよう。アイスクリームバーでお金を支払えば、アイスクリームを楽しむことができると私はまだ考えている。しかし、失業しているために、私は十分なお金を持っていないということが分かっている。したがって、私はアイスクリームを買うことができない。すなわち、労働市場という社会構造が、私が目的に到達することを妨害するのである。もし(3)が(1)と(2)の後に続くならば、私たちは以下のような言明を導入しなければならない。

(2b) Aはxを行うための力を持っており、そうすることを妨げられることはない。

この言明は、Aが存在している社会的文脈を表現している。したがって、行為は力の行使から構成されており、エージェントが持つ力は社会構造に依存しており、また社会構造によって影響を受けると、私たちは結論づけることができる。

構造的説明とエージェント的説明のそれぞれは、社会学者が選択しなければならない二つの全く異なるパラダイムと見なされてきた。

事実パラダイムもしくは客観主義

構造



エージェンシー

方法論的全体主義：

説明は構造からエージェンシーへと進む

行為パラダイムもしくは主観主義

構造



エージェンシー

方法論的個人主義：

説明はエージェンシーから構造へと進む

しかしながら、結論は以下の通りである。客観主義と事実パラダイムは、人々の価値や行為の多様性および歴史的变化を説明する上で困難を抱えている。同様に、主観主義と行為パラダイムは、社会のパターンがしばしば示すような安定性を説明する上で困難を抱えている。これらの二つのモデル間の関係には、深い社会科学的ジレンマがある。両者とも重要な知見を含んでいるが、同時に説明にとっては不十分な基礎にしかない。

まずはじめに、二つのパラダイムを統一するのは難しいと考えることもまた安易なことである。事実モデルも行為モデルもともに、よく似た特色(sympathetic traits)を持っている。すなわち、そのモデルはあなたが見ているものに依存しているということである。私たちが社会について見回すとき、私たちは人々の行為とその結果以外のものを見ることはできない。私たちは、働き遊ぶ個人、ものを売り買いする個人、結婚し離婚する個人を見ることができる。しかし、[社会構造そのものではなくて、]社会構造[が生み出す]の諸効果のみを見ることができるのである。賃金労働の構造なくして雇用されることはなく、そしてその構造は余暇時間の遊びにも関連する。サービス市場や財市場なくして、買い手や

売り手にはなれない。結婚という制度なくして、結婚や離婚はできない。この観点からすると、あなたが何かを望むから、あなたはあなたがすることを行うのではなく、社会がそのようにさせるからなのである。したがって、両パースペクティブが同時に真となることはない。しかし、私たちの多くは、二つの視点の存在を認識しており、さらに両者がともに合理的に見えると感じている。だが、それらは同時には成り立たないのである。私たちは、社会生活を、それぞれある時点において、ある方法もしくは別の方法で見るのである。したがって、事実パラダイムでは、分析は、人々のエージェンシーについて考慮することなく、客観的な社会構造へと還元される。他方、行為パラダイムは、社会構造について考慮することなく、分析を、個人の主観や行為へと還元するのである。

これらの存在論的想定〔真に存在するものは構造か行為か〕から、方法論的処方箋が得られる。事実パラダイムは、方法論的全体主義と呼ばれるものに帰結する。この立場は、社会科学の研究対象—個人の行為を含む—は、社会構造、地位、機能などに出発点を置き、研究されるべきと主張する。説明は、社会現象から個人へと進まなければならない。行為パラダイムに当てはめると、対応する規則は方法論的個人主義と呼ばれるものである。この立場は、個人の行為や個人が行為する文脈の背景にある原則に出発点を置かななければならないということを意味している。その規則は、説明は個人から社会現象へと進まなければならないと主張する。

対立した方法論を伴う、この二つの対立したパラダイムの置かれた状況は、もちろん満足のいくものではない。それゆえ、社会科学において、社会構造とエージェンシーを同時に分析的に考慮することを可能にする重要な試みが存在している。理論的および方法論的提案は、二つの議論の流れから生み出される。ひとつは、両者の間の二重性 (duality)を主張する。すなわち、構造とエージェンシーの間に同

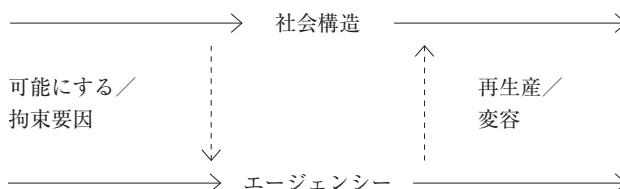
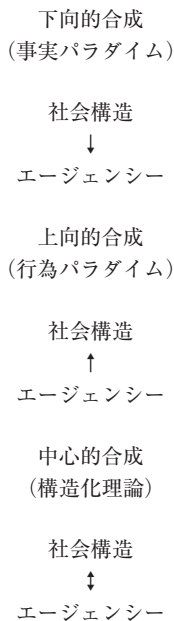
一性 (identity) がある。言い換えると、構造とエージェンシーは同じことの二つの側面ということである。もうひとつは、そうではなく、両者の間の二元性 (dualism)〔この下線のみ訳者が追加〕を主張する。それら〔構造とエージェンシー〕は非同一性 (non-identity) である。言い換えると、構造とエージェンシーは相互に関係しているが、相異なる現象だということになる。これらの〔異なる〕存在論的立場が異なる方法論へと導くのである。

二重性：ギデンズの構造化理論

二重性を支持する人々の間でもっとも影響力のあるアプローチは、ギデンズの構造化理論である。ギデンズの野心は事実パラダイムと行為パラダイムの間の矛盾を解決することであり、彼はそれを構造化理論と呼ぶ。この理論によれば、エージェンシーと構造を分離した実体と捉える代わりに、私たちは、構造化の過程と二重性について語るべきである。構造は、個人から分離して存在することはない。すなわち、それらは、いつでも社会的行為の媒体であり、また社会的行為の帰結でもある。しかしながら、このことは以下のことを含意する。すなわち、エージェントと構造が、ある一方を他方から区別できない方法で、それぞれを構成するのである。それぞれは相互関係の中でのみ概念化されるのである。構造はエージェントの行為によって事例化され (instantiated)、それによって、構造が〔単なる〕「ヴァーチャルな」存在に過ぎないということを含意する。一方で、構造が社会的実践において用いられないとき、それらは人々の中に「記憶の痕跡 (memory traces)」として存在するのみである。さらに構造化理論は、社会的な文脈における創発を否定する。というのも〔この立場では〕、エージェンシーと構造は、力やメカニズムを保持する現象としては分析されえないからである。結果として、ギデンズは、初期の理論におけるものとは完全に異なる構造概念によって研究しなければならなくなる。すなわち、社会構

造は「規則と資源」から構成されるものとなる。エージェンシーの行為と社会構造は、同じ事がら—すなわち社会实践—の異なる側面となるのみである。この統一におけるひとつの「側面」の分析は、他の側面を無視することを必要とする。すなわち、ギデンズが「方法論的括弧入れ (methodological bracketing)」と呼ぶものである。彼は、社会構造と制度を分析する際に、私たちはエージェンシーとその特性を考慮外におかなければならないとする。同様に、エージェンシーを分析するときには、私たちは社会構造を考慮外におかなければならないのである。

構造化理論によって代表される、社会的事実と行為パラダイムの間の対立のこのような解決は、「中心的合成 (central conflation)」と呼ばれるものに帰結する。



社会的事実モデルでは、社会構造は存在するが、行為は存在しない。エージェンシー・モデルでは、行為は存在するが、社会構造は存在しない。一方で、構造化理論のモデルでは、両者の間に区別がなされない。構造とエージェンシーはそれぞれ相互の支えがなければ存在できないのか、というのが中心的合成の問題点である。(ここで、私たちが説明モデルについて議論しているという点に注意が必要である。実際の社会がこれらのあるモデルに完全に合致する形で作動していると信じる社会学者はいない)。

そこで私たちは、構造とエージェンシーは同じ過程の二つの要素ではないという考えとともに始めることにしよう。代わりに、私たちは二つの異なる現象を扱うのである。社会構造はすべてのエージェントにとって、すでにそこに存在しているものである。すなわち、それらは端的にそこに存在しているのだ。[とはいえ] これは、社会が人間の行為なくして存在しうることを意味しないし、個人が自らの行為についてなんの理解もなしにその行為が起こりうることを意味しない。他方で、個人はゼロから社会を作り出すと主張することもできない。代わりに、私たちは、それらを再生産するもしくは変容させるのである。もし社会構造がすでに存在しているならば、行為はそれらを修正できるのみであり、行為の一連の全体はそれらを維持するもしくは変化させるのである。社会構造は個人に還元することができない一方で、それらはどのような人間の行為にとっても前提条件である。すなわち、社会構造は行為を可能にする一方で、どのような行為が可能に関する限界を設定する。推論のこのつながりから、私たちは、人間活動の形態転換モデルを形成できるだろう。こ

の議論の基礎は、ロイ・バスカー (Roy Bhaskar) により発展されたものである。

この实在論的な形態転換モデルは、すでに議論してきた三つの各モデルと矛盾せず、またそれらが弁護のために言及する議論とも矛盾しない。しかしながら、これらのうちどれも、このモデルそれ自身を支持するものではない。このことは、これが唯一のモデル (大文字の M) であり、エージェンシーと構造に関する究極的な真実であるということの意味しない。むしろ、現在において私たちが保持している最善のモデルであることを意味しているに過ぎない。社会構造とエージェンシーは異なる力や特性を持った二つの分離された現象として見なされるため、ここでの強調点は創発におかれることになる。

このことは、形態転換モデルと矛盾がなく、マーガレット・アーチャーによって発展されたと考えられるもう一つのモデルのための出発点ともなる。ここでも、社会構造は行為や社会的相互作用が生じる文脈であり、また同時に社会的相互作用は構造が再生産もしくは変容される環境を構成する、という事実強調点がおかれる。構造とエージェンシーは分離された階層である。すなわち、それらは完全に異なる特性や力を持つが、一方は他方がどのように形作られるかにとって重要なのである。私たちが社会科学的研究を遂行するとき、私たちは、単に一方もしくは他方のみを研究することに満足すべきではないのである。例えば、「ギデンズの括弧入れ」の中で、それらを片方に押し込んでしまうように。そう

ではなく、私たちは構造とエージェンシーの間の相互作用を研究すべきなのである。

この結びつきの中で、分析に時間的次元が存在することを、私は指摘したい。時間を考慮に入れることで、アーチャーは、彼女が分析的二元論 (analytical dualism) と呼ぶ手続きを定式化した。「二元論」とは、社会構造と人間エージェンシーが異なる階層に存在するという事実を指している。「分析的」とは、これらの階層およびそれらの間の相互作用は、社会的行為や人間の経験といった流れの中で発見することはできず、社会科学的分析の手法によってのみ発見することができることを指している。分析的二元論は、構造とエージェンシーの基本的モデルを、時間的次元におくのである。したがって、モデルは、第一に、構造とエージェンシーは異なる力と特性を持つ二つの異なる階層であり、第二に、構造はエージェントの行為を拘束し可能にするのであり、第三に、エージェントは構造を再生産し変容させるのである (後者に関するアーチャーの用語は「構造的エラボレーション」である)。

これらのことを背景として、分析的二元論は二つの命題を打ち立てる。第一に、社会構造は、その再生産もしくは変容へと導く行為に対して、時間的に先行する。存在しないものを変化もしくは維持することはできない。したがって、構造がまず最初にやっとなければならない。第二に、構造的エラボレーションは、それを生み出す行為の後にやってくる。再生産もしくは変容はエージェントの行為の結果で

(1) Structure (構造)
T¹

(2) Interaction (相互行為)
T² T³

(3) structural elaboration (構造的エラボレーション)
T⁴ (T¹)

あり、したがって、それら [エージェントの行為] がエラボレーションの前にこななければならない。

以上から、私たちは以下のような連続を持つこととなる。出発点 (T1) において、社会構造はエージェントの行為のための条件をなす (拘束要因や促進要因といった形態をとる) [Tは特定の時点を表現している]。次の局面 (T2からT3) では、行為とエージェントの社会的相互作用は、これらの条件の下で生じる。最終的に (T4), 相互作用は、問題とされていた構造を再生産もしくは変容させるのである。すなわち、エラボレーションである。実際のところ、これは連続というよりもサイクルといえる。というのも、エラボレーションした構造は、次の瞬間に、次の相互作用 (新しいT1) の条件となるからである。

これらの局面は、実際の生活において直接的に発見されることはない。ただ、それらは分析的区別を意味しているのみである。しかしながら、構造とエ

ージェンシーを厳格に区別することなく、これらの局面における相互作用を検討することは不可能である。アーチャーが指摘するように、社会科学における分析にとって、私たちは構造とエージェンシーに関して、合成の帰結がそうであるように、一方を他方に埋没させるのではなく、相互に結びつけなければならないのである。このような結びつけは、構造とエージェンシーの経時的な相互作用の探査によってなされる。

社会科学がなし得る社会的実践へのもっとも生産的な貢献とは、社会構造、その力、性向、メカニズム、傾向性などを探査することであると、私たちは結論づける。というのも、人々、集団、組織は相互作用においてそれら [構造、力、性向、メカニズム、傾向性] について考慮し、もし彼らが望むのであれば、既存の社会構造を変化もしくは除去することを目指し、さらに新しいものを確立することを目指すかもしれないからである。